

英語冠詞指導再考

関 口 智 子

1. はじめに

英語の冠詞は、日本人学習者にとって数ある文法項目の中でも、最も習得が困難なもの1つだとされている。織田(2007)のあとがきに、R.A.Close氏が講演の冒頭で、英語の学習で外国人にとって最も困難なのは、“Tenses, articles and prepositions”であると力説したとある。織田は、英作文の授業や英語論文の査読の経験から、なかでも冠詞は最後まで躓きの石として残るのではないかと言っている。日本では、中学、高校と計6年間英語を学習しても、冠詞を適切に使用することは至難の業である。学習の初期段階では、些細な部分に意識を向けず、骨子となる基本構文の習得を優先する方が現実的のように思われる。しかし、いつまでも「冠詞を間違えても何とかなる」という意識がある限り、学習が中断してしまい、不正確な表現が固定化、化石化してしまいかねない。英語を読み聞く際に、より深い理解が得られるように、また書き話す際には、より正確に伝えたい内容を表現できるように、冠詞に対する意識を変え、冠詞の仕組みを習得する必要があるのではないだろうか。

本稿では、まず英語学習者の冠詞理解を概観し、その後で、日本人の冠詞習得を困難にしている要因を考察する。その後、平成24年から26年の3年間に出版された文部科学省検定済教科書48冊を対象に、高校で冠詞がどのように扱われているかを調査した結果を報告する。

2. 英語学習者の冠詞理解

石田(2012)は、以前に日本人の英語学習者が冠詞という文法項目をどのよ

うに感じているかを調べるため、高校2年生約180名を対象にアンケートを実施した。下の表は、その調査結果を示したものである。

よくわかっている	0%
だいたいわかっている	5.3%
あまりよくわからない	54.4%
わからない	24.3%
いずれとも言えない	16.0%

アンケート調査の対象となった高校2年生は、すでに4年以上の英語学習歴があるが、冠詞に関して「わからない」が24.3%、「あまりよくわからない」が54.4%という回答であった。合計すると8割近くの学生が、冠詞の用法に関し理解が不確かであることがわかる。

関口(2013)では、大学の必修英語の1つ「初級英文法」の履修者を対象に、大学生の冠詞理解に関するアンケート調査を試みた。英語の冠詞について知っていることを自由に記述させ、29名より回答を得た。その中で、冠詞の用法に関して、29人中8人が、aは『不特定』なものに使うと回答したのに対し、14人の半分近くの学生がtheは『特定』なものに使うと回答した。このことから、調査した学生の間には『不特定』より『特定』という概念の方が定着していることが窺われる。

問題は、『特定』および『不特定』をどう理解しているかであるが、『特定』という概念に関して、「1つしかないものに使う」(2人)、「2度目以降、すでに話題に出ているものに使う」(3人)、「話し手と聞き手が共通に理解しているものに使う」(4人)という記述が見られた。やり取りしている人の間で、共通に理解しているもの、共通のものが浮かんでいる場合にtheを使うという定冠詞の基本的概念をおさえている学生はわずか4人であった。

また、定冠詞・不定冠詞の根本的な意味や機能ではなく、「studentなどの時はaを使う」、「teaにはaでなくa cup of teaを使う」のように断片的な知

識しか持ち合わせていない回答も一部見られた。その他、「場所、建物、国、固有名詞には the を使う」(10人)、「the は後ろのものが名詞の時に使う」(1人)、「人の場合は a を使う」(1人)など、冠詞用法に関して様々な誤解や混乱が散見された。

一方、名詞の可算・不可算用法に関しては、「数えられないものには冠詞をつけない」(2人)、「数えられないものには the を使う」(1人)と、ルールを単純化している学生も存在した。一般的に数えられない名詞には不定冠詞は使用されないが、聞き手との間に共通認識があるものに言及する場合には、the furniture, the information のように定冠詞なら使用可能である。また、通常不可算とされる名詞であっても、話し手が、形のある存在としてとらえている場合は、不定冠詞で表現することが可能である。I'm watching TV. では、無冠詞の「TV」は放送局から送信され画面に映し出されている映像を指し、I'm getting a new TV. では、TV は不定冠詞 a を伴い、形状のある製品としてのテレビ受像機を表わしている。

3. 冠詞習得を困難にする要因

上述のアンケートの回答から、学生は、英語冠詞の仕組み、および名詞の可算・不可算用法に関して根本的な理解を欠き、単純化したルールでしかとらえていないことがわかる。ここでは、日本人による英語冠詞の習得を困難にしている要因について考察する。まず、石田(2012)が指摘している3つの要因、冠詞の機能語としての性質、コミュニケーション重視の考え方、母語の影響を概観する。この他に、冠詞の適切な選択に大きく関与していると思われる英語的なものにとらえ方、認知のあり方について触れる。

冠詞習得を困難にしている1つ目の要因として、冠詞の表している意味が、とらえどころがなく具体性を欠いていることが挙げられる。品詞の分類として、冠詞は前置詞などとともに機能語として分類される。名詞、動詞、形容詞など、事物、動作、状態、容態など明確な意味内容を表す内容語に対して、機能語は抽象的な文法関係を表示する。内容語ではないという性質から、冠

詞は、意味内容が不明瞭であることが要因の1つとして考えらえる。

2つ目の要因として、コミュニケーション重視の考え方が挙げられる。実際のコミュニケーションでは、冠詞を脱落しても、状況、文脈からかなりの程度意思疎通を図ることが可能である。文の骨組みを構成する内容語である名詞や動詞がきちんと挿入されていれば、冠詞が省略されていてもコミュニケーションに支障をきたすことはあまりない。そのため、冠詞の誤りは、誤答分析の分野では、コミュニケーションを困難にする恐れのある全体的な誤り (global error) に対し、局所的な誤り (local error) としてあまり問題視されなかった。局所的な誤りであれば、やり取りを重ねていくうちに誤解があっても最終的には解消されうる。そこで、学習者が冠詞用法を意識するあまり、委縮してコミュニケーションがとれなくなってしまうことを懸念し、冠詞の誤りは放置されがちであった。ある英語のネイティブスピーカーが、駅前で日本人に “Do you know the department store near here?” と聞かれ、非常に当惑したというエピソードがある。the department store と言われても、どのデパートのことなのか自分はわからないので、大変戸惑いストレスを感じたようだ。そこで、探しているのはこの辺の a department store なのかと確認したところ、やっと納得がいったという。このように、単純な冠詞の使用ミスであるが、ネイティブスピーカーにとっては、自分の認識できないものがいきなり the のついた名詞で提示されると混乱を引き起こすことがわかる。最終的には誤解は解消されるからいいという立場ではなく、このような誤解の種を初めから蒔かないことが望ましいのではないだろうか。

冠詞習得を困難にしている3つ目の要因として、母語からの干渉、つまり日本語には冠詞が存在しないことが挙げられる。石田 (2012) によれば、名詞や動詞などの内容語はどの言語にも普遍的に見られるが、冠詞を有する言語は非常に限られているという。世界の言語を見ると、インド・ヨーロッパ語族の中で、ロマンス語派のフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、またゲルマン語派の英語、ドイツ語、オランダ語などには冠詞が存在する。一方、インド・ヨーロッパ語族の言語でも、スラブ語派のロシア語、ポー

ランド語、チェコ語などには冠詞に相当するものはない。また、アジアの言語では、日本語、韓国語、中国語には冠詞は存在しない。このように、言語類型的に普遍的でない文法項目は、他の普遍的な文法項目と比べ周辺的な存在とされ、その習得が困難になると考えられる。

しかし、母語からの干渉が大きな要因であるならば、日本語に存在しない他の文法項目も同様に習得が困難なはずである。たとえば、日本語には英語の関係代名詞や関係副詞にあたる形態素は存在せず、動詞を連体形に活用させた文を名詞に前置して修飾する。英語とは形態的にも統語的にも全く異なるが、日本人学習者は、導入段階で多少の混乱はみられるものの、最終的には関係代名詞や関係副詞を習得できるようになる。仮定法も、過去、過去完了があり複雑な時制の概念が要求されるが、明示的指導と練習で習得が可能になる。そう考えると、母語に存在しない文法項目の習得は困難であっても、習得が不可能ということにはならない。

4つ目の要因は、関係代名詞、関係副詞、仮定法などの文法項目と異なり、冠詞の適切な形態の選択には英語的なものの見方が関与しているということである。たとえば、関係代名詞の習得では、まず英語と日本語の語順の違いが障害となる。日本語では修飾部が被修飾語の前に置かれるのに対し、英語では修飾部である関係節が後置される。また、日本語では関係代名詞にあたる形態素は存在しないが、英語では先行詞の格によって、**who**、**whose**、**whom** など適切な形を選択しなければならない。複雑そうな操作に思えるが、いったん構文を身に付けてしまえば、適切な文の生成に迷うことはない。

それに対して、冠詞の適切な選択には、英語特有のものの方の見方、認識のあり方が不可欠である。英語冠詞の基本体系の理解には、名詞の意味対象に個としての形や姿が認められるか、そして特定対象の指示同定に必要な情報知識が話し手と聞き手の間で共有されているか、この2点に関する判断が必要となる。前者は、名詞の可算・不可算性の区別を決定し、後者は、名詞の特定・不特定の識別に関与している。前者の識別に関して、織田(2007)は、[± 個性]、つまり + individual (+countable) か - individual (-countable) か、石田

(2012) は [± 有界性] (±boundedness) という概念を用いている。用語こそ異なるが、どちらも名詞の指示対象が境界線や区切りによって仕切られているか、形や重さのある物理的存在であるかを問題にしている。重要なのは、話し手が対象をどのようにとらえているかという認知のあり方である。一方、後者の識別に関して、織田 (2007) は [± 特定性] (±identified), 石田 (2012) は [± 定性] (±definiteness) という概念を用いているが、どちらも名詞の指示対象を聞き手が唯一的に同定していると話し手が考えているかどうかを表す概念と言える。このような英語特有のものの見方も、日本人学習者の冠詞習得を困難にしている要因であると考えられる。

4. 文部科学省検定済教科書での冠詞の扱われ方

4.1 平成 20 年～ 22 年

関口 (2013) では、高校用文部科学省検定済教科書で冠詞がどのように扱われているかを調査した。平成 20 年から 22 年の 3 年間に出版された教科書の中から以下の 51 冊を対象とした。

科目名	冊数
英語 I	10
英語 II	10
リーディング	10
ライティング	8
オーラルコミュニケーション I	9
オーラルコミュニケーション II	4

合計 51 冊

この中で、冠詞を個別に取り上げている教科書は、英語 II で 10 冊中 1 冊、ライティングで 8 冊中 3 冊、計 4 冊であった。この調査では、大部分の教科書が、冠詞を文法項目としては取り上げず、定冠詞、不定冠詞、無冠詞の用法に関

する記述が少ないことがわかった。

4.2 平成 24 年～ 26 年

本稿では、関口 (2013) のフォローアップとして、平成 24 年から 26 年の 3 年間に発行された教科書を調査した。今回の調査で対象とした教科書の科目と冊数は以下のとおりである。

科目名	冊数
英語会話	2
コミュニケーション英語基礎	1
コミュニケーション英語 I	4
コミュニケーション英語 II	3
コミュニケーション英語 III	22
英語表現 I	1
英語表現 II	15

合計 48 冊

この中で、冠詞を個別に取り上げて説明している教科書は、コミュニケーション英語 III で 22 冊中 3 冊、英語表現 II で 15 冊中 4 冊、計 7 冊であった。英語表現 II のうち 2 冊は、名詞または名詞と数について触れているが、冠詞に関する記述はなかった。以下、教科書における冠詞に関する記述の一部を紹介する。

4.2.1 英語会話

英語会話では、会話の教科書ということもあり、調査した 2 冊 (平成 24 年) には冠詞や名詞を文法項目としているレッスンはなかった。教科書 A では、Lesson 1 の最初の会話に、I work for a publisher. / I'm a Japanese high school student. という文が登場しているが、教科書 B では、Lesson 1 の最初の会話で、

名詞の使用は固有名詞と代名詞に限定されていた。普通名詞が使用されていないため冠詞も導入せずにすることから、冒頭のレッスンとしてはよいストラテジーだと思われる。

4.2.2 コミュニケーション英語基礎

コミュニケーション英語基礎では、教科書 C (平成 24 年) を調査した。全 9 レッスンの中で、冠詞および名詞の単複に関する記述はなかった。冠詞が初めて登場するのは、Lesson 1 の主語と動詞を説明する以下の例文である。(下線は筆者による。)

You belong to a soccer club. (p.13)

不定冠詞 a を使用した例文が使用されているが、それに続く以下の練習問題では、冠詞には触れずに、このレッスンの主眼である主語と動詞にのみ焦点をあてている。

例にならって主語に下線をつけ、動詞を○で囲みなさい。

例 : I(am)a high school student. I(go)to school every day.

(1) The planet is the Earth.

(3) Birds fly in the sky.

((2)(4) は省略)

(p.13)

練習問題の例文には、a high school student, school, the planet, the Earth, birds, the sky という表現があり、a + 単数, ϕ + 単数, the + 単数, ϕ + 複数と様々な冠詞用法が登場しているが、冠詞に関する記述はない。最初のレッスンであり、主語と動詞という構文に焦点をあてるため冠詞の記述はさけたと思われる。

続く Lesson2 の受け身構文の説明の後に、以下のような練習問題が与えられている。

右の動詞を適切な形にして () に入れ、受け身の文を完成しなさい。

(1) *Black Jack* () () by TEZUKA Osamu. [write]

ブラック・ジャックは手塚治虫によって書かれた。

(2) The cartoon () () by many people. [love]

そのマンガは多くの人々に愛されている。

(3) I () () hopes and dreams by the cartoon. [give]

私はそのマンガによって夢と希望を与えられている。

(p.21)

上の例文は、不定冠詞から定冠詞の用法の移行を示すのに絶好の文脈である。(1) の **Black Jack** という漫画のタイトルである固有名詞が、(2) では **The cartoon** という普通名詞に置き換えられ、既出の **Black Jack** という漫画を指すため、定冠詞の **the** が付けられている。(3) でも同じ漫画について言及しているので、引き続き **the cartoon** と定冠詞を伴った表現が使われている。

また、次のページでは **Let's Communicate 2** というタイトルで、次のような会話文が掲載されている。(下線は筆者による。)

Akashi: Great! I love cartoons. Tezuka, lemme go to your house to read your cartoons. In return ...

Osamu: What!

Akashi: If someone bullies you, let me know. I'll take care of it.

Osamu: Look, I don't need that. I don't want to be part of gang.

Akashi: Not my gang, but like a brother. I've loved cartoons since I was a little kid. But now the government has forbidden them. You can't get

them any more.

Osamu: Yeah. It's too bad.

Akashi: Tezuka, keep on drawing cartoons, and live a long life.

Osamu:...

(p.22)

前頁の練習問題で、the cartoon という表現が登場したが、ここでは cartoons という無冠詞複数形が「漫画というもの」という『総称』の意味で数箇所使われている。数頁後にも、無冠詞、不定冠詞、定冠詞をともなった例文が使われているが、冠詞および名詞の単複に関する言及はない。

4.2.3 コミュニケーション英語 I

コミュニケーション英語 I では、教科書 4 冊 (平成 24 年) を調査した。この 4 冊は、関係代名詞、関係副詞、仮定法過去などの文法項目を導入しているが、全 10 レッスン中、冠詞および名詞の単複を文法項目として扱っているものはなかった。ここでは、教科書 D の一部を簡単に紹介する。

教科書 D では、Lesson1 が以下のパッセージ、歌手アンジェラ・アキによる自己紹介文で始まっている。(下線は筆者による。)

Hell. I am Angela Aki. I am a singer-songwriter...

I wrote a letter to myself...

My mother kept the letter....

I read the letter from my past. Then, I wrote a song about that letter. The title is "A letter – Dear Fifteen-year-olds." In the song, I sing for you.

(p.6)

上記パッセージは、a letter から the letter へ、そして a song から、その歌のタイトル the title へ、さらに the song へと、文のつながりと展開を意識した冠詞用法を提示するのに絶好のコンテキストである。ここでは冠詞に関し

て言及はないが、教員が補足的に解説してもよいであろう。

4.2.4 コミュニケーション英語 II

コミュニケーション英語 II では、教科書 3 冊（平成 25 年）を検討した。3 冊すべて文法とリーディングを主眼にしているが、ここでも全 10 レッスン中、冠詞および名詞に関して取り上げているレッスンはなかった。これらの教科書では、文法項目として、(複合)関係代名詞、(複合)関係形容詞・副詞、仮定法、倒置、独立分詞構文、過去完了進行形など比較的難易度の高いものを扱っている。冠詞に関する記述がないのは、冠詞は既習項目とされているからかもしれないが、初期段階から導入されていても習得が困難な冠詞の性質を考えると、複数の機会を使って学習者の意識に刷り込んでいくことが望ましいのではないだろうか。

4.2.5 コミュニケーション英語 III

コミュニケーション英語 III は、22 冊（平成 26 年）を検討した。ここでは、何らかの形で冠詞に関し記述のあった 3 冊、教科書 E,F,G を紹介する。ここでの特徴は、コミュニケーション活動の中で遭遇する冠詞用法について、補足的な説明を加えるにとどめている点である。

教科書 E は、Useful Structures! というセクションで、冠詞の省略を取り上げている。

1. 補語の名詞に冠詞をつけなくてもよい場合

「役職」や「称号」などが補語になる場合には、冠詞をつけなくてもよいことがあります。

In 1750s, he became captain of his own ship.

They elected him President of the United States.

In addition to being principal, he's also an English teacher for first-year

students.

(p.133)

教科書 F では、「英字新聞を読もう」と題する章で、英字新聞の記事の構成や見出し語法を扱っている。見出し語法の 1 つとして、以下の例文を挙げ、新聞の見出しでは冠詞が省略されることについて触れている。

4. the や a などの冠詞は省略されます。

[例] Railroad aimed at promoting economic development for ethnic minorities. (p.17)

どの冠詞が省略されているかに関して説明はないが、英字新聞を読めるレベルの学生であれば、授業中に学生に考えさせるのもよい練習になると思われる。両教科書とも、基礎的な冠詞用法は既習という前提で、冠詞の省略という例外的な用法について補足的に触れていると思われる。

教科書 G は、「文のつながり」の章で、「文のつながりを意識して読む」というテーマで、代名詞や言い換え表現、また文章の論理展開を示す語句、ディスコースマーカーを紹介している。その中で、冠詞に関して以下の記述がある。

1. 冠詞の変化 (a + 名詞 → the + 名詞)

He took a wallet out of his pocket. He opened the wallet and took out some bills. (p.8)

ここでも同様に、基礎的な冠詞の用法は既習とみなし、英語で書かれたものを「読む」という活動を通して、与えられた文脈の中で冠詞の用法を確認している。

4.2.6 英語表現 I および II

次に、英語表現 I および II の教科書を見てみよう。事情により、英語表現 I は 1 冊の教科書（平成 24 年）しか検討できなかったが、全 16 レッスン中、冠詞、名詞の単複を文法項目にしているレッスンはなかった。英語表現 II は、15 冊の教科書（平成 25 年 13 冊、平成 26 年 2 冊）を調査したが、その中で冠詞または名詞に関して記述しているものは 6 冊であった。以下にその 6 冊の教科書 H, I, J, K, L, M について概要を紹介する。

教科書 H と I の 2 冊は、名詞については触れているが、冠詞に関する記述はなかった。まず、教科書 H は、Grammar for Writing というセクションで、集合名詞、物質名詞、抽象名詞に触れている。family, audience, staff, committee, people など人の集合を表す名詞は、単数と複数扱いの場合があることを述べ、tea, fog, baggage などの物質名詞や、peace, information などの抽象名詞には注意を促している。ライティングの文法のセクションで扱っていることから、特に「書く」際の冠詞用法に焦点を置いていられると考えられる。

教科書 I も、全 20 レッスン中、Lesson 5 のリーディングセクションの一部で、文法項目として「名詞と数」は扱っているが、冠詞については取り上げていない。まず、可算名詞と不可算名詞に関して、以下のように説明している。

名詞には、個数を数えられるものを表す可算名詞と、水や砂糖のように均質的で境界のない物質などを表す不可算名詞があります。water, sugar などの不可算名詞は、基本的に常に単数として扱われます。

① 「角を曲がったところに本屋が一軒あります。」

— 「いいえ、二軒ありますよ。」

“There is **a bookstore** around the corner.”

— “No, there are **two bookstores** there.”

② ジャムとマーマレードと、どちらが好きですか。

Which do you like better, **jam** or **marmalade**?

(p.30)

また、集合名詞に関しては、例文とともに以下のような記述がある。

集合名詞の場合、全体として捉える場合は単数、個々のメンバーに注目する場合は複数形をとります。

ご家族はお元気ですか。

How is your **family**?

私の家族はみんなカレーが好きです。

All my **family** like curry and rice.

彼のコンサートには多くの聴衆が来ていた。

There was a large **audience** at his concert.

聴衆は全員彼の演奏に感動した。

The **audience** were all moved by his performance.

(p.30)

この後に、二択の中から適切なものを選び文を完成させる練習問題が続くが、以下にその中の5題から2題を引用する。

② He had (bread, a bread), (egg, an egg), (yogurt, a yogurt)
and (tea, a tea) for breakfast.

④ Excuse me, but would you please make (some rooms, some room)
for my grandmother?

(p.30)

②で問題となるのは、場合によってはどちらの選択肢も可能であることである。卵は、ゆで卵や目玉焼きのように1つの卵として形が認識できる場合には **an egg** が適切であるが、もし卵を割り混ぜてスクランブルエッグやオ

ムレツのように料理され原形をとどめていなければ **egg**, または **some egg** がふさわしいと思われる。また、ヨーグルトも大きな容器から小皿に取り分けた場合は **yoghurt** と無冠詞であるが、小さな包装されたカップで出された場合は形のある1つのヨーグルト **a yoghurt** として認識することが可能である。**tea** など飲み物に関しても、この文脈とは異なるが、喫茶店のような場所で注文する際には **a tea, two teas** と可算で使うことがよくあることを補足した方が望ましいであろう。また④の問題では、文脈から正答は「スペース、余地」という意味の **some room** であるが、学生たちはすでに **room** を「部屋」という可算名詞で学習しているので、混乱を避けるためにも、名詞は可算と不可算両方に用いられることがあり、その場合意味が異なることを強調すべきであろう。

次に教科書 J では、可算・不可算名詞および定冠詞・不定冠詞に関し、以下のような複数の例文を日本語訳とともに提示している。(日本語訳は省略する。)

可算・不可算名詞

There was a large **audience** in the stadium.

Shota has some **knowledge** of universal signs.

There is very little **room** to put up the big bulletin board.

定冠詞・不定冠詞

The rich are not always happy.

The number of public telephone is decreasing.

Every train station in this city has **an** escalator and **an** elevator. (p.36)

既習事項の確認として例文だけの提示にとどめており、教科書には記述はないが、教員から解説が行われるのであろう。

教科書 K では、**Grammar Tip** としてリーディング本文中に登場した文を

例文に引用し、Noun および Article のセクションを設け解説している。

Grammar Tip Noun

It is fortunate that our **team** has its own soccer ground.

His coach's pieces of **advice** helped him get through his long-term slump.

[×His coach's advices...]

The baseball game took as much as **four hours**.

[×as many as four hours]

(p.49)

Grammar Tip Article ①

Earth and Mars move around **the** sun at different speeds.

[固有名詞として扱うときは Earth には the をつけないことが多い]

What is **the** star shining near the moon tonight?

[×what is a star shining...]

A galaxy is one of the independent groups of stars in the universe.

Cf. Galaxies are made of stars.

Hubble's new theory was so unusual that just a few people believed it.

[×The Hubble's new theory...]

(p.73)

Grammar Tip Article ②

I want to go to **a** university. [×an university]

That university is easily accessible **by bus**. [手段を表す場合]

I can **go to college** thanks to my uncle's help.

[本来の目的で使用する場所を表す場合]

(p.77)

リーディング本文中で使われた文を例文に使用しているため、本文を参照し文脈にもとづき冠詞用法を検討することができる。しかし、個別の規則の列挙という印象があり、冠詞の基本体系、仕組みが見えにくくなっている

のが残念である¹。

教科書 L は、Structures のセクションで、「名詞の数、数量、冠詞や代名詞に注意して表現してみましょう」という指示で、以下の 5 つの日本語文を英語で表現させる問題がある。

その新しいテクノロジーが、**果物と野菜**の生産を倍に増やした。

新製品向けに**多くの**アイデアが提案されたが、**ほとんど**実行に移されてはいない。

車はもっと安全な乗り物に作り替えられるべきだ。

10 年後には、**新たな通信機器**が**携帯電話**に取って代わるだろう。

デジカメが壊れた。もっと高性能の**新品**を買いたいな。 (p.38)

モデル訳として、太字の日本語に対応する英語表現はそれぞれ、fruit, vegetables (可算・不可算名詞), many..., few... (数量を表す形容詞), cars (種類全体を表す複数), a new communication device, the mobile phone (冠詞), a new one (代名詞) が使用されている。また、別のページでは、アウトプットでの冠詞の使用を意識してか、ライティング推敲の際、「単数・複数は正しいか」、「冠詞は正しいか」がチェック項目として加えられている。

教科書 M は、可算・不可算名詞の区別および冠詞について必要最低限の

¹ 次頁の練習問題で、解説で取り上げたものとは異なる用法が 1 箇所見られる。解説で「本来の目的で使用する場所を表す場合」として、I can go to college thanks to my uncle's help. という例文を挙げ、無冠詞の使用を紹介している。しかし、必要であれば適切な冠詞を記入する練習問題の 1 つに He goes to the college by () bus every day. という文が使用されている。出題の意図は、by bus という手段を表す無冠詞用法にあるが、その直前の go to the college という表現にも注目が行ってしまう。混乱を避けるために、go home のような別の表現を用いた方がよいと思われる。

知識を端的にまとめている。まず、可算・不可算名詞に関しては、「book のように一冊、二冊と数えることができるものは数えられる名詞であり、milk や love などは数えられない名詞である。数えられない名詞でも、a cup of coffee, a piece of advice, two sheets of paper のように、容器や単位を表す語を使って数えることができる」と説明している。この教科書では、「同じ名詞が、数えられる名詞にも数えられない名詞にもなることがある」とし、a language (個々の言語) と language (言語というもの) の違いを例文で示しているのが特徴的である。また、数えられる名詞と数えられない名詞の例をリストアップしており、両方に用いられる名詞として、chicken (ニワトリ vs. 鶏肉), room (部屋 vs. 余地, 空間), work (作品 vs. 仕事) も列挙している。

また、冠詞に関しては、「初めて話題に出るものや、聞き手・読み手がそのものを特定できないものが単数の場合は、数えられる名詞の前に a/an を付ける。複数の場合や数えられない名詞の場合は a/an を付けない。話の中ですでに出てきたものや、聞き手・読み手が何を指しているのかが特定できるもの場合は、名詞の前に the を付ける」と説明している。その後、複数の例文の提示に続き、冠詞選択の手がかりとして以下の表を掲載している。

話し手や読み手の理解	数えられる名詞		数えられない名詞
	単数	複数	
何を指しているのか特定できない場合	a book	books	water
何を指しているのか特定できる場合	the book	the books	the water

(p.13)

冠詞の決定に不可欠な2つの概念をこのようにわかりやすく表の形にまとめているのは、今回の調査ではこの教科書のみであった。

5. おわりに

本稿の高校用文部省検定済教科書の調査により、冠詞および名詞に関する取扱い方は教科書によりかなり異なること、また冠詞が決定される仕組みとなる概念よりも、むしろ個別のルールの記述に紙面が割かれていることがわかった。教科書に記述がなくても、また記述が足りなくても、教師がその不足を補っていくことは可能である。名詞の可算・不可算性の区別を決定する[± 個性性]または[± 有界性]、名詞の特定・不特定の識別に関与する[±(特) 定性]という概念は、中学1年生には難しくても、高校や大学では十分理解できると思われる。冠詞の習得を通して、まさに英語的なものの見方、とらえ方を習得できると考えれば、冠詞の学習に意義を見出すことができない消極的な学習者にも大きな動機づけとなるのではないだろうか。

謝辞：

本稿は、平成26年度高崎経済大学競争的研究費の助成を受けたものである。

参考文献

- 石田秀雄 (2012) 『わかりやすい英語冠詞講義』 東京：大修館
- 河合忠仁 (1992) 「中学英語教科書における冠詞の問題点」, 『近畿大学教育論叢第3巻第1・2号』, 1-26. 近畿大学教職教育部
- Krashen, S. (1981). *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.
- 織田 稔 (2007) 『英語冠詞の世界』 東京：研究社
- マーク・ピーターセン (1988) 『日本人の英語』 東京：岩波新書
- Murphy, R. (2012). *English Grammar in Use with Answers: A Self-Study Reference and Practice Book for Intermediate Students of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 関口智子 (2000) 「日本人英語学習者の冠詞習得について」, 『情報文化論』4号, 58-79. 情報文化研究会
- 関口智子 (2013) 「英語の冠詞習得に関する一考察 ―明示的文法指導の効果をめぐる―」, 『研究資料集』21号, 59-68. 東海大学教育研究所
- 白畑知彦・横田秀樹 (2012) 「明示的文法説明の有効性と限界―物質名詞の単数形・複数形の習得を例にとり―」, 中部地区英語教育学会

調査に使用した文部科学省検定済教科書

英語会話

書名	発行者	検定済年
HELLO THERE!	東京書籍	平成 24 年
MY PASSPORT	文英堂	平成 24 年

コミュニケーション英語基礎

書名	発行者	検定済年
JOYFULL ENGLISH	三友社	平成 24 年

コミュニケーション英語 I

書名	発行者	検定済年
NEW ONE WORLD	教育出版	平成 24 年
COMPASS	大修館	平成 24 年
PRO-VISION	桐原書店	平成 24 年
WORLD TREK	桐原書店	平成 24 年

コミュニケーション英語 II

書名	発行者	検定済年
GENIUS	大修館	平成 25 年
PRO-VISION	桐原書店	平成 25 年
WORLD TREK	桐原書店	平成 25 年

コミュニケーション英語 III

書名	発行者	検定済年
ALL ABOARD!	東京書籍	平成 26 年
POWER ON	東京書籍	平成 26 年
PROMINENCE	東京書籍	平成 26 年
DISCOVERY	開隆堂	平成 26 年
CROWN	三省堂	平成 26 年
MY WAY	三省堂	平成 26 年
NEW ONE WORLD	教育出版	平成 26 年
COMPASS	大修館	平成 26 年
GENIUS	大修館	平成 26 年

SKILLFUL	啓林館	平成 26 年
ELEMENT	啓林館	平成 26 年
LANDMARK	啓林館	平成 26 年
POLESTAR	数研出版	平成 26 年
BIG DIPPER	数研出版	平成 26 年
UNICORN	文英堂	平成 26 年
GROVE	文英堂	平成 26 年
MAINSTREAM	増進堂	平成 26 年
NEW STREAM	増進堂	平成 26 年
PERSPECTIVE	第一書籍	平成 26 年
VIVID	第一書籍	平成 26 年
PRO-VISION	桐原書店	平成 26 年
WORLD TREK	桐原書店	平成 26 年

英語表現 I

書名	発行者	検定済年
MONUMENT	開拓社	平成 24 年

英語表現 II

書名	発行者	検定済年
NEW FAVORITE	東京書籍	平成 25 年
CROWN	三省堂	平成 25 年
MY WAY	三省堂	平成 25 年
NEW ONE WORLD	教育出版	平成 25 年
DEPARTURE	大修館	平成 25 年
VISION QUEST	啓林館	平成 25 年
POLESTAR	数研出版	平成 25 年
BIG DIPPER	数研出版	平成 25 年
UNICORN	文英堂	平成 25 年
GROVE	文英堂	平成 25 年
MAINSTREAM	増進堂	平成 25 年
PERSPECTIVE	第一書籍	平成 25 年
VIVID	第一書籍	平成 25 年
SCREENPLAY	スクリーンプレイ	平成 26 年
ATLANTIS	チアーズ	平成 26 年